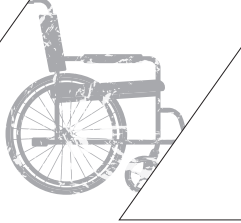

 卷頭言


「安寧な世の中」と科学的思考と 日本在宅ケア学会

A Peaceful World and Scientific Thinking and The Japan Academy of Home Care

 下田 信明

日本在宅ケア学会誌, 25(2): 3-4 (2022)

日本において一旦収まったかにみえた新型コロナウイルス感染症は、これを書いている現在（2022年1月7日）、オミクロン株による新たな感染拡大の様相を呈してきており、第6波に入ったとする識者もいます。欧米などにおける1日の感染者数は過去最高を更新する日々であり、それらの国と比較すれば感染者数、死亡者数とも少ないとはいえ、日本においてもまだまだ油断できない、厳しい日々が続くものと思われます。この約2年間における多くの医療・保健・福祉専門職や関係者の方々の治療・予防に対するご尽力には本当に頭の下がる思いです。特に、WHOが2020年3月に「パンデミック（世界的大流行）」を宣言し、わが国で2020年4月に緊急事態宣言が発出されてから1年間位の、どのような感染症かわからない、ワクチンはない、治療薬はない、というような時期に、感染リスクが高い医療現場などで働くことは大きな不安や恐怖が伴ったと思われます。関係者の皆様には本当に深く感謝いたします。

このパンデミックを経験して、日本の、世界の一人一人が多くのことを感じ、考えたことと思います。私も小さいことから大きいことまで、自分を含めた身近な人のことから日本中や世界中の知らない人のことまで、住んでいる八王子市、東京都、日本のことから訪れたことのない国のことまで、今のことから過去・将来の事まで、空間と時間を超えて感じ、考えたように思います。そして、ありきたりな思いを強くしました。それは「安寧な世の中がいいなあ」ということです。

では、「安寧な世の中」とは、具体的にどのような世の中なのでしょう。それは、以下のような世の中かと思えます。平均寿命や健康寿命が長い、乳幼児死亡率が低い、妊婦の出産時死亡率が少ない、自殺者が少ない、戦争・紛争が少ない、戦死者が少ない、殺人事件が少ない、犯罪が少ない、病気が少ない、身体障害や精神障害があっても普通に暮らしている、飲み水がきれい、ご飯をしっかり食べることができる、屋根のある家で寝ることができる、生まれ（階級）や性や国籍や肌の色で差別されることがない、お互いを尊重する、移動の自由がある、仕事がある、職業選択の自由がある、希望すれば教育を受けることができる。コロナ禍を経験して、世界中の人々がこのような「安寧な世の中」の大切さを痛感したのではないかと思います。では、これらの「安寧な世の中」は実現可能なのでしょうか？

私の趣味の一つは読書ですが、今まで読んだ本のうちのベスト5は、「暴力の人類史」、「21世紀の啓蒙」、「進化の存在証明」、「神は妄想である」、「FACTFULNESS」の5冊です。これらの本の内容は似ていて、主な主張は、「過去からみると世界は確実に良くなっている」「現在は、過去7,000年の人類史の中で最も平和な時代である」「過去に行われてきた殺人、戦争・紛争、刑罰、拷問などがいかに理不尽であり、いかに人間の命が軽い存在であったか」「世界における感染症死者数、災害による死亡者数、戦争・紛争の犠牲者数、低栄養者率、乳幼児死亡率などは顕著に低下してきている」「世界における平均寿命、教育年数、所得は着実に増加してきている」「それらを可能にしたのは科学・技術であり、大事なものは科学的思考である。決して神学的思考ではない」「人は世界がどんどん悪くなっていると考えがち

だが、そう考えるのは根拠のない思い込みである」「思い込みを避けるためには、正しいデータを知る必要がある」などです。これらの本を読むと、10年後や100年後や1000年後は、今より「安寧な世の中」が実現されているのではないかと希望を持つことができます。

日本の過去をみてみます。戊辰戦争（1868年）や西南戦争（1877年）以降、日本人同士の戦争は起こっていません。しかし逆に言えば、たった145年前までは日本人同士で戦争をしていたのです。ただ、今の我々にとって、東京や関東・東北地方に住む日本人が鹿児島県や山口県に住む日本人と戦争をすることは考えられません。たった145年で人の意識は大きく変わったのだと思います。同様に、たった77年前にはアメリカ人やイギリス人と戦争をしていましたが、これも現代の感覚ではありえないことです。日本人の感覚がこのように変化したのですから、今、戦争や紛争をしている人々の意識も、100年後や1000年後には変化しうのではないのでしょうか？

日本における2021年の交通事故死は2,636人で、過去最少だそうです。昭和の時代には1万人以上が交通事故で亡くなっていました。平均寿命の伸び、乳幼児死亡率減少、経済成長、教育年数の増加などをみても、そして江戸時代以前の飢饉の記録などを鑑みると、日本は確実に良くなっていると考えるのも良いように思います。

では、「安寧な世の中」の実現のために最も大事なことは何でしょうか？先の5冊からの受け売りですが、やはり、科学的思考であると思います。

今回の新型コロナウイルス感染症に対するワクチンは従前とは比較にならない速さで実用化されました。mRNAを用いるという斬新な方法で開発されたとのこと。これは科学的思考が「安寧な世の中」作りに役立った顕著な一例です。しかし、世界中の全ての人がこのワクチンを受け入れているわけではありません。ワクチンを受け入れない考え方を反科学主義、反知性主義と言ってよいかは議論があるところかもしれませんが、その傾向があるのは否定できないと思われます。米国には進化論を否定し、この世界の全てを神が創ったと考える人々が少なからずいるそうです。病気になっても西洋医学を否定し、祈祷に治療を委ねる人も世界には数多くいます。戦争や紛争・テロリズムが起こる背景には貧困や失業率の高さとともに十分に科学的思考を身につけることができないこともあるように思えます。

このように、「安寧な世の中」を実現するために最も重要なことは科学的思考であると思っていますので、自分が日々行っている仕事もそこに結び付けたいと考えています。今回、亀井智子理事長を委員長とするガイドライン作成委員会の委員として、エビデンスに基づいた在宅ケアの実践ガイドライン作成に携わりました。この作成において、最も信頼性が高いとされる研究手法であるランダム化比較試験を用いた在宅ケアに関する研究が世界中でどの程度なされているかを網羅的に調べました。このことにより、世界中の在宅ケア研究者の科学的思考を知ることになったと思っています。また、それらを基に実践ガイドラインを作ることは、10年後や100年後や1000年後の「安寧な世の中」作りにわずかながらではあっても貢献しているはずだと夢想しています。

また、学術集会長として、第27回日本在宅ケア学会学術集会を来る7月に、一橋大学一橋講堂（東京都千代田区）において開催いたします。この学術集会も、将来の「安寧な世の中」作りに貢献しているはず。在宅ケアに携わる多職種の専門職が集い、西洋近代医学に基づいた科学的思考を基盤に、お互いの考えや思いや経験について議論することは、目の前の患者さん、対象者さんに役立つだけでなく、大きく言えば、将来の「安寧な世の中」に繋がっていると思います。

学術集会では、高校生とともに在宅ケアを考える公開講座を計画しています。今の高校2年生は、高校入学直後の4月（2020年）に緊急事態宣言の発出を受けました。思いもしなかった高校生活になってしまったと感じている生徒さんも多いと思います。未来を暗く感じている生徒さんもいるかもしれません。この公開講座で、在宅ケアの現場で元気に働いている大人の姿を見てもらい、次代を担う高校生に未来への希望を持ってもらいたいと思います。それもまた将来の「安寧な世の中」の実現に繋がるものと思っています。

本誌で巻頭言を書くのは2回目です。前回同様、エッセイ的な、専門性のない文章になってしまいました。他の方が書かれた巻頭言と比べるとお恥ずかしい限りです。また異論、反論、一部では共感など、色々感想があるかと思っています。そのような場合、ぜひ、7月の学術集会にご参加ください。皆様と議論やお話ができたら幸いです。